



よろい

甲を着た古墳人だより



公益財団法人
群馬県埋蔵文化財調査事業団

甲を着た古墳人の提碕さげとと刀子とうす

甲を着た古墳人について詳細な調査を進めたところ、腰に提碕と刀子を所持していたことが明らかになりました。

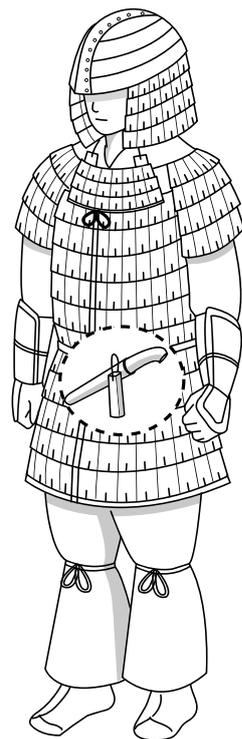
提碕は、碕石に穴をあけ紐を通して腰に提げられるようにしたものです。金井東裏遺跡では甲を着た古墳人が所持していたほかに、2号古墳の埋葬部と1号古墳の墳丘上、7号掘立柱建物脇、さらに遺構外からの1点をあわせて5点の提碕が出土しています。

刀子は小型のナイフですが、甲を着た古墳人が持っていた刀子は、細い線を刻んだ鹿角ろっかく製の柄をつけていました。

ここでポイントとなるのは、甲を着た古墳人が提碕と刀子をセットで所持していたことです。

4世紀～5世紀の朝鮮半島南部では、王や貴族たちが金銀の飾りとともに提碕と刀子を腰に提げることが行われていました。提碕と刀子が、官職や身分をあらわす装身具の一部となっていたと考えられています。

日本国内で提碕にどんな意味が込められていたのか未解明な部分が残されていますが、金井東裏遺跡の提碕と刀子は、甲を着た古墳人が朝鮮半島と関係が深い人物であった可能性を秘めているのです。



甲を着た古墳人の甲の内面(腹側)で発見された提碕と刀子

■ 甲を着た古墳人の提砭と刀子

古墳人が着ていた甲の内部を調査したところ、提砭と刀子がちょうど腹部にあたる位置で見つかりました。

提砭は使用の痕跡が少ない角柱状のタイプです。鹿角製の柄をつけた刀子は革製の鞘に納められ、腰の帯に提げられていたと考えられます。



鹿角製の柄 穴のあいた提砭と鹿角製の柄がついた刀子

■ 2号古墳出土の提砭と刀子

2号古墳は直径8mの円墳です。埋葬部から出土した提砭は、全体が薄いタイプの砭石でした。一方の端には複数の鉄製の環が通されていました。この環で帯から提げられていたのでしょう。

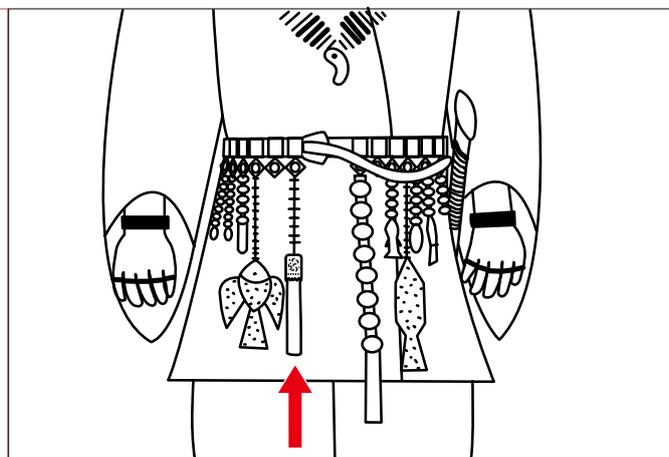
木製の柄をつけた刀子が同じ石室から出土しています。



2号古墳出土の提砭

■ 朝鮮半島の提砭

右のイラストは金・銀製の飾り金具で砭石を包み込む直方体の砭石を他の飾りとともに提げている新羅の貴族の姿です。朝鮮半島では、提砭が三国時代（概ね日本の古墳時代）の新羅を中心にして伽耶や百済の地域で出土しており、地域ごとに素材や形の違いがあります。



■ 提砭と刀子の謎を探る

日本では、金井東裏遺跡のように提砭が5点も出土することは希なことです。これらの提砭は、朝鮮半島のどの地域のスタイルを地域首長が取り入れた結果なのでしょう？

甲を着た古墳人が所持していた提砭と刀子を通して、当時の古墳社会と朝鮮半島との関係を探る作業はこれからも続きます。



1号古墳の墳丘上

7号掘立柱建物

遺構外